



市川昌広・生方史数・内藤大輔（編）『熱帯アジアの人々と森林管理制度——現場からのガバナンス論』人文書院，2010，280p.

アジアのどこかで、村の人に案内してもらい、熱帯林を歩くとしよう。俗世を離れ、大自然に身を浸らせようなどという淡い期待は裏切られるだろう。自然保護区、木材伐採許可の区域、村の人が主張する慣習的な土地利用の区域、など、実にさまざまな利害が絡み合っていることを目の当たりにするだろう。生き馬の目を抜く世の中、次々と新しい制度が生み出され、自然を新たに価値付けしなおし、その帰属をめぐり綱引きする。CBD（生物多様性条約）、CDM（クリーン開発メカニズム）、CBNRM（地域共同体ベースの自然資源管理）、REDD（途上国における森林減少・劣化からの温室効果ガスの排出削減）、FSC（森林管理協議会）やそのほかの認証制度など、略称を覚えるだけでも目が回りそうである。これらは、机上の空論として会議室で踊っているだけでなく、それぞれに、パイロット的なプロジェクトが動き出し、森林や、そこに暮らす人々に、直接、影響を与えようとしている。だから、無視することもできない。

たくさん制度が乱立するなかで、それらの細部を一つ一つ吟味するより、まず全体の流れを把握しておく必要がある。制度の性質ごとに整理・分類し、それがもたらす政治経済的構図を分析するのである。本書はまさにそういう本である。国家が独占的に資源を管理・利用するという「従来型」に加え、上記の略語のような新しい制度的な動きを、「住民参加型」（コモンズのような地域住民主体の森林管理への転換をはかるもの）、及び、「市場志向・グローバル型」（温室効果ガス排出権や生物多様性保全など、森林の適切な管理・利用を経済的に価値付け、市場メカニズムによって保全するもの）、の合計3つに整理する。その上で、地域住民への影響という観点から、それぞれの特徴を見えやすく提示している。大まかな構成としては、序章のあと、第1部（第1章～第3章）で「従

来型」、第2部（第4章～第6章）で「住民参加型」、第3部（第7章～第11章）で「市場志向・グローバル型」について扱い、終章で、各部・各章の議論をまとめよりよい森林ガバナンスのための提言を行っている。各章では、それぞれの制度について、フィールドワークでじっくり調査された成果をふんだんに使った事例研究を展開しており、フレッシュで読み応えのある論考となっている。なお、第9章、第11章は、それぞれ、CDM植林、生物多様性条約につき、事例ではなく、その対象となりそうな地域の実情に照らして、もし、本当に対象となったらどうなるか、という仮定での議論となっている。すべての制度について詳細に調査された事例研究を集めることは困難だろうから、これは致し方のないところだろう。

これら、3つの型のいずれかとして示された事例は、現在の森林管理の潮流の具体例というだけではない。読み比べれば、自然と、東南アジアを中心とした熱帯アジアの各国の森林管理の背景にある政治経済的状況が透けて見える。「従来型」の事例が紹介されている国や地域は、権威主義的政治体制が色濃く残るのに対して、「住民参加型」の事例が取り上げられる国では、やはり、一定の民主化の進展がみられる。「従来型」で登場するマレーシア・サラワク州では、森林認証取得が試みられていて、「市場志向・グローバル型」でも紹介されている。そこでも指摘されているように、地域社会への配慮は本物ではないと批判されている。やはり基本は「従来型」なのだ。反対に、1998年まではスハルト大統領のもと、強権的な政治が行われていたインドネシアが、どれほど変化したのか、本書の事例を読み比べれば実感することができる。また、「市場志向・グローバル型」で登場する国や地域は、登場しない国に比べ、大規模な木材生産国、あるいは、林業が重要な産業である国であることもわかる。もちろん、本書で取り上げられている事例はほんの一例にすぎず、登場しないからといってそうした事例がないという意味ではない。しかし、それらの事例の取り上げ方は、意図したものか偶然かはわからないが、各国の事情を反映している。

各章の内容を具体的に紹介することは紙幅の都

合上、できない。全体を俯瞰して印象的なのは、「市場志向・グローバル型」だけでなく「住民参加型」でも、政府が森林管理の道具として「住民参加」を利用するなど、成功例とはいえない例を取り上げている点である。「住民参加」という名目にとらわれず、国家の権力作用を注意深く観察しようという姿勢は、現場の住民へのシンパシーに軸足を置く本書の特徴であろう。

しかし、序章や終章での全体のまとめや、各章を通底すべき論理的な軸といった点で、明瞭さを欠いていることも否定できない。本書の中核としての問題意識は、「地域住民が森林管理の制度をうまく使いこなし、森林を持続的に利用していくには何が必要なのであるか」と端的に示されている(序章p.9)。住民へのシンパシーも本書中、各所に窺える。では、あくまで住民の側に立ち、その生活を守ることを第一義とするのかというと、そうとも言えない。「住民参加型」「市場志向・グローバル型」は、強弱の違いはあれ、ともに、人権・民主主義、環境面での持続可能性、というグローバルな価値を内包している。この二つの価値は、煎じ詰めれば相対立するものである。そのため、どこでバランスをとるのが重要になる。ところが、住民参加型、あるいは、地域住民主体の森林管理をめぐる多くの議論で菌切れが悪くなるのは、この潜在的対立、つまり、住民の生活の「ための」森林の持続可能性なのか、森林の持続可能性の「ための」住民参加なのか、がぼやけてくるからである。それを乗り越えるために、本書はどのようなスタンスをとるのか。核になる価値は何なのかがあやふやなままなのである。例えば、第11章で、「普通の生活を守る」という姿勢を明言している。しかし、同章の前段では、狩猟採集民プナンの暮らしの持続可能性を検討している。おおむね持続可能だという結論になっているが、仮に持続可能でなかった場合には彼らの生活・文化が変化を強制されてもよいのか否かという点には触れていない。他の章を含め、本書全体として、漠然と地域住民に愛着は感じつつ、守るべきものは何か、保たれなくてはならないバランスはどこにあるのかは曖昧なまま、なんとなく、住民の生活を持続的森林管理の両立、と謳っているようにも見える

のである。もし、あくまで地域住民の生活を守ることに徹するのであれば、極論すれば、持続可能性が科学的に担保されないとしても、住民が暮らしてきた森は彼らのものであり、手出しするべきではない、というのが筋である。

仮に、そういう立場をとるならば、次に問題となるのがイデオロジカルな権力であろう。本書では、「住民参加型」「市場志向・グローバル型」ともに「上」からの論理の浸透として批判的にみる立場を基本的にとっている。しかし、そこで注意しているのは、住民の「利益」であり、明らかに資源が利用できなくなった、あるいは、制度がニーズに一致しない、というような目に見える不便を取り上げて問題視している。もちろん、そうした実際上の不便も問題だが、本書中でも参照されているアグラワル [Agrawal 2005] が指摘するような、住民がそうとは気づかずに政府の統治性に絡め取られてしまう側面にも着目すべきであろう。地域住民にとって森林が持つ意味は、国際社会や熱帯アジア諸国における森林管理の制度の設計・運用の担い手、私たちのような研究者、NGO関係者のいずれとも違う。研究であれ、政策であれ、経済活動であれ、「対象」でしかない森林とは違い、地域住民にとっては自らの生活世界、あるいは「生」そのものの一部なのである。そこに、グローバル・スタンダードである持続可能性、人権、民主主義といったイデオロギーが権力性を帯びて浸透してゆく時に、住民の主体性の所在がどうなるのか、精査してみる必要があるだろう。

このように考えると、本書の結論部で示されるローカル、ナショナル、グローバルの間に横たわる重層的な制度とその接合面をどうつなぐか、ということは実はそれほど本質的な問題ではないようにも思われる。自生的な社会的秩序やネットワークが存する「強くしなやかな社会」(終章p.253)が担保することで(成文ルールとしての)制度が有効に働くことの意義を主張している。しかし、住民の生活・文化を守ることを中心に考えれば、有害な制度を形骸化させ、運用面での柔軟性を安全弁として確保することのほうが重要である。現場の実情から乖離した制度が強権で実行されてしまうのが最大の悲劇である [Scott 1998]。

くりかえしになるが、森林が持つ意味は立場によって違う。異なる視点、異なる価値尺度が並立する状況では、客観的に森林の価値を計ることはできない。さまざまな制度の多くは地域住民の外側から押し寄せてくる。あるいは、両者のせめぎ合いの産物である。その中で、価値中立的な立場をとることは不可能である。住民の生活を守り、彼らが主体的に自然との関わりに立脚して生活環境を構築してゆくことを保障するために、どの制度のどの部分は利用できるか、現行制度では不足であればどのような制度が必要か、誰とどのように手を組むべきか、といった戦略を考える。これが住民の視点に立つということだろう。地域研究的なポリティカル・エコロジーの真骨頂でもある。本書が示すように、日本のポリティカル・エコロジー研究は、近年、急速に充実してきている。今後の知的なブレイクスルーに期待したい。

(藤田 渡・甲南女子大学文学部)

参考文献

- Agrawal, Arun. 2005. *Environmentality: Technologies of Government and the Making of Subjects*. Duke University Press.
- Scott, James. 1998. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. Yale University Press.

横山 智・落合雪野 (編). 『ラオス農山村地域研究』めこん, 2008, 456p.

I はじめに

本書は、総合地球環境学研究所の「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究——1945-2005」(平成15~20年度)の森林農業班プロジェクトメンバーを中心として、地理学、農学、林学、社会学、人類学などの多分野に亘る計15名の執筆者により、ラオス農山村の姿を描き出そうとした、ラオス研究を担う新世代の嚆矢となる論文集である。同プロジェクトでは、『図録メコンの世界——歴史と生態』(2007, 秋道智彌 (編)), 『論集モンスーンアジアの生態史——地域と地球を

つなぐ』全3巻(2008, 秋道智彌 (監修))も同社から出版されており、本書は、メンバーの中堅である編者の手による独立した企画ではあるものの、実質的にはこれらの成果を併せて「三部作」を構成するものとみなしてよい。¹⁾

日本におけるラオス研究に関する出版は、2000年代前半から急速に発表されるようになったが、一般書を除いては本書の執筆者の一人でもある中田 [2004] や拙著 [園江 2006] を含め、特定の地方や調査地における調査を中心としたものがほとんどであり、その点において本書の内容は、各章で論じられている地域的広がりには広狭はあるものの、全体としてラオス全国を学際的見地から考察した質と量を伴う学術的結晶として画期的であるといえる。

II 本書の構成と内容

本書の構成は、4部11章からなっており、編者らによる総論として第1章の「ラオスをとらえる視点」と「まえがき」「あとがき」のほかに、社会・水田・森林・生業の4部からなるテーマ別論考10章および5編の小論が収められている。以下では、紙幅の都合上小論の詳細については割愛させてもらい、各章の概要を見ることにする。

第1章「ラオスをとらえる視点」(河野泰之・落合雪野・横山 智)においては、本書の視点を次のように示している。まず東南アジアの中におけるラオスの特徴を、明確な中心地と熱帯デルタという米の生産拠点を持たない「内陸国」であり、近隣地域と比較して、少人口かつ人口密集地を持たず、稲作農地の分布もまばらな「自給農業を基盤とした分散型社会」とする。次に、地図からの経年的な分析により、①この地域が過去100年間に亘り森林によって覆われ、②その植生は多様でモザイク状に分布し、③国レベルでは森林面積の変化がないという特徴を提示の上、近隣諸国と比較して森林が維持されてきており、その背景を信仰や、生物資源や生産性を維持する焼畑のサイク

1) このほかにも、関連出版として同プロジェクト平地生態班メンバーを中心とした『ヴィエンチャン平野の暮らし——天水田村の多様な環境利用』(2008, 野中健一 (編), めこん)がある。

ル、あるいは交易用産物の採取といった「伝統的な住民の森林管理や森林での生業活動から導く」ことが可能であるとする。続いて農業については、稲作を中心としながら、水田と焼畑でイネのみならず多様な作物や生物資源を生産する自給農業であり、農地面積では、国土に占める規模が極めて小さく過去30年間で急激な変化はなかったとする一方、「人々の社会組織や文化、信仰とも深く関連している」水田水稲作と焼畑陸稲作のバランスは、水田の拡大と焼畑の縮小として水稲を主とした生産様式に変化し、ラオス社会の再編契機となる可能性を指摘している。さらに「最近の変化」として、1980年代半ば以降の交通・通信インフラの整備により、国内交通の中心は舟運から陸路へ移行し、人やモノの移動が促進され、これに伴い農山村においても商品作物栽培が普及し、生業構造を変化せしめ、多民族国家ラオスにおける民族関係やアイデンティティにも変化を及ぼしていると結論づける。そして、最終的に分散型社会に生きる人々が培ってきた知恵と実践の「伝統的あり方に普遍的価値」と、「変容する様子に、地域特有の経過や結果」を見出そうとする二つの視点を導き出している。

以降は各論となり、第1部「社会」は2章と小論1「人魚伝説とゴールドラッシュ」(増原善之)からなる。第2章の「消えゆく水牛」(高井康弘)は、ラオス北部における水牛の飼育と利用およびその変容について論じている。ラオス北部の農家では、少数頭ながら水牛を飼っており、それらは①水田稲作で使役される役畜、②精霊への贄や宴のご馳走、③蓄財や利殖のための動産として多面的な利用価値をもっているという。水牛は、村の共有地である焼畑休耕地あるいは稲刈り後の水田で放し飼いされており、そのメリットとして飼料調達負担や水田の除草の手間が省けるなど「農業との相互利用関係」を挙げ、水牛が不慮の出来事で落命するなどのデメリットはあるものの、さまざまな生業複合を特徴とする生活の中で畜産のみの効率性を追及しようとはしていないと分析する。しかしながら、これらの放し飼いは「豊富な適地の存在と周囲の人々の了解があってこそ」可能であり、2000年代中ごろ以降、水牛の飼養頭数

が急減した理由を次のように分析した。①森林法に基づく土地区分の実行および商品作物作付け耕地拡大に起因する土地利用の変化によって、水牛による農作物食害係争が多発し、水牛飼育と農業の相互補完関係は対立的なものに変質、②これに加えて近年パラゴムノキ植林の急速な進行と食害問題の発生は、行政による放し飼いの禁止へと繋がり、この結果、③他地域への委託飼育と最終的には水牛の売却が加速した。このことは、耕耘機普及の一因にもなっていると指摘している。また、農地の不足から現金労働へと生計基盤が変化し、食肉需要が増加することで食肉流通が活発化したことも、農村から水牛が減った要因であるとした。

第3章では、「民族間関係と民族アイデンティティ」(中田友子)として、多民族国家ラオスにおいて相対的多数を占めるラオと先住民であるラオ・トゥンとの関係性と、両者におけるアイデンティティのあり方を分析している。ここでは、ラオとラオ・トゥンの関係について、かつての宮廷儀礼にみられる神話・伝承から両者の表象的関係性が最初に示されるが、これに対して筆者のフィールドワークに基づくラオス南部の村落における事例に基づき、文化的・経済的両側面から現在「ラオと少数民族の人々の間に大きな差異があるとは考えにくい」とする。そして、この「民族間の対立や差異よりもむしろ親和性や融合性が目立つ」理由として、①「国家として公的な民族の確定を行っていないために人々の民族的アイデンティティがあいまい」、②「人々の民族的アイデンティティがあいまいだから公的な民族の確定が遅れている」という二つの見方を提示し、現実には「ラオ化」により民族間の境界があいまいになったり、民族の移動を可能にしていると指摘する。一方、Evansによる北部におけるシンムーンと黒タイの関係や、新江によるベトナム中部高原における山地民とキンの関係との比較から、ラオス南部に見られる関係性は、より融合的であり「自発的で軋轢を生まない同化」であるとしている。

第2部「水田」も2章と小論2「タマサートな実践、タマサートな開発」(田中耕司)で構成されている。第4章「水田を拓く人々」(富田晋介)は、ラオス北部ウドムサイ県において行ったフィール

ドワークをもとに、水田開拓の過程を記述し、その要因を検討している。はじめに調査地となった村における水田稲作の手順が示される。続いて、衛星画像と現地確認により地図を作成して現在の水田の分布を把握し、これを用いて村人へ聞き取りを行って水田の拡大過程復元を試みた結果、総水田面積は一定の割合で増加している一方、開拓面積の拡大には波があることを解明した。そして、この拡大の波は人口増加率の変動と関連が見られることから、水田面積の拡大は人口増加の影響を受けたものであり、集落近くの用水を容易に獲得できる場所から開拓が進んだと分析している。そして最後に、水田は親から全ての男子が相続するため、村の社会では富の蓄積が集中しない構造になっていたとした。しかし、最近の水田適地の減少等による水田面積の固定化が世帯階層の固定化につながると考えられる一方、裏作や商品作物栽培といった農地の集約化と新たな利用価値が創造され、これが今後両者の固定化を緩和するものになる可能性を暗示している。

第5章「水田の多面的機能」(小坂康之)は、ラオス中部での現地調査をもとに稲作の方法から景観による水田の分類を紹介し、水田の機能について解説している。また、アジアにおける農業近代化の過程で表面化した環境問題についても言及し、その中におけるラオスの水田の評価を行っている。ここでは、サヴァンナケート県にある二つのラオ村落での天水田における一連の稲作手順がまず示される。次に農民の言葉から「丘陵の水田」「集落の水田」「低地の水田」「湿地の水田」という異なる環境と稲作の方法を持った水田景観の区分を行い、この違いが水条件にあることを看破する。そして、この異なる水田景観のもとに稲作以外の機能があることが明らかにされ、イネと家畜、園芸生産を組み合わせた農業生産を行う「農業の場」、水田に生きる野生動植物利用のための「採集と捕獲の場」、自然湿地に代わる希少生物の「保全の場」という三つの視点から、その機能の検討が行われる。その結果、これらの機能はラオス以外の地域でも見られるものの、東南アジア諸国では「緑の革命」の流れの中で水田はコメを生産する場として特化され、その多面的機能が失われてきており、

行き過ぎた近代化による弊害がもたらされたことにより、ラオスの水田の多面的機能を「次世代の水田の姿」として評価している。

第3部「森林」は、3章と小論3「森に映ずるラオスと日本」(福田恵)からなる。第6章「土地森林配分事業をめぐる問題」(名村隆行)では、筆者が在籍した日本国際ボランティアセンター(JVC)での活動経験をもとに、ラオスにおける森林の利用と所有をめぐる問題を論じている。まず、1990年代初めに開始されたラオス政府による土地森林配分事業の目的と実施方法が概説され、これにより住民参加型の森林管理が制度的に認められた点で画期的であったとしながら、制度と運用の間における乖離がさまざまな問題を生む種となっていることを指摘している。そして、JVCによる土地森林配分事業を活用した村落共有林支援の事業紹介を通じ、「人口の増加と農地の不足に関する問題は、森林保全を重視する傾向にある土地配分事業の課題」であり、農地の保留地確保が必要であるとする。そして、「土地森林配分事業の導入によって村人による森林管理意識と実践の向上が見られた」一方で、土地・森林や森林資源の帰属に関して近隣村との間や、企業の土地取得等村の外部との関係において問題が発生しているとしている。その上で、これらの権利侵害が発生する要因を①法令と現実の執行との間に乖離が見られ、②民間企業の開発事業に与えるコンセッションに関して、中央政府と地方との間に大きな違いがあり、③土地森林配分事業と他の優先政策との競合にあるとして、「トップダウンの一方通行の意思決定システムを超えて、各アクター同士が対等な立場で対話する努力」の重要性を強調している。

第7章「植林事業による森の変容」(百村帝彦)は、ラオスにおける植林事業の実態とその功罪について考察をしている。はじめに森林再生手段としての「植林」について、メリット・目的・土地の所有・事業形態によって類変化し、ラオスの現状を、政府所有地の産業植林を主体とする、企業プランテーション型・契約型・住民主体型の三つの事業形態と分析する。続いて、ここ数年の間に急増した前述3形態によるパラゴムノキの植林について、関連法の改正・政府による奨励・北部ル

アンナムター県における成功例という三つの相乗的要因を挙げ、一方、その不安要素の多さも指摘している。次に「契約型」植林の事例として比較的成功裏に進んでいる民間企業による学校林に対して、援助機関による植林事業の失敗例を紹介し、植林事業によって貧富の差を拡大させ、用地の拡大に伴い産物の採集地等が奪われる危険性を持つものと警告している。

第8章「非木材林産物と焼畑」(竹田晋也)では、ラオス北部に住むカムーの焼畑と非木材林産物の生産について、ルアンパバーン県におけるラック導入の試みを紹介し、それらを通じ焼畑「安定化」の可能性を検討している。カムーの人たちは、焼畑での陸稲栽培農業に加えて、非木材林産物の採集や生産によって現金収入を得ており、それは、かつてのランサーン王国時代の交易で金のほかに安息香とラックが重要であったことから示される。そのうえで、時代の変化の中でも「市場経済化によって、森林と人々の多様なかわりが極端に単純化されることはなかった」としている。続いて、筆者の参加したルアンパバーン県における住民支援プロジェクトの対象となったS村での焼畑土地利用のモニタリング状況が紹介されるが、焼畑地の不足による移住や隣村からの土地借り入れの現状が明らかとなり、また焼畑での陸稲栽培から、畜産や紙の原料となるカジノキなどの非木材林産物の生産へと移行しつつあるものの、タイへのカジノキの輸出増加は見込めないとしている。そこで、中国市場での需要が期待され、ラオスで歴史的に生産されてきた染料や樹脂原料のラック生産に着目し、プロジェクトでの普及が試みられた結果、焼畑「安定化」に充分貢献できることが確認されたとしている。そして最後に、「陸稲の栽培によってコメを確保しつつ、家畜飼育を組合せながら、最適非木材林産物を導入していく」ことが今後取るべき方向であり、その点でラックは焼畑のリズムに合った焼畑「安定化」の目的に適うものであると提言している。

第4部「生業」は、3章と小論4「土壌から見た焼畑農業」(櫻井克年)および小論5「農村から観光地へ」(横山)の2編からなる。第9章「焼畑とともに暮らす」(落合・横山)は、二人の筆者が

「焼畑への新しいアプローチ」として、ポンサーリー県における事例をもとに、住民の村の領域把握とそこにおける生業活動および植物利用を民族植物学(落合)と地理学(横山)の共同研究により取組んでいる。はじめに生業としての焼畑および焼畑「問題」についての事実確認が行われ、ラオスの農山村で焼畑を営む住民の生活の実態にアプローチするため、植物の利用に関して自給自足の側面と現金収入の両側面と、利用植物の空間的・生態条件を把握することにより村の空間と生業活動を関連づけ、その成果として「有用植物村落地図」の作成を試みたとしている。フィールドワークを行ったアカ・ニューの村では、住民は村の空間を耕地・年数別の休耕地・道路・河川といった九つに区分していたとし、それら全ての空間で何らかの生業活動が行われていることを確認したとする。次に衣食住・身体のケア・冠婚葬祭・現金収入といった植物の利用法別の解説がなされ、代わりに「焼畑にもなって空間区分の生態環境が変化し続ける中、そこで行われる生業活動の全体によって住民の生活が支えられて」いるため、焼畑村における土地利用理解のためには、「空間という水平面の上に、時間の経過という奥行きを重ねてとらえる必要」を説き、焼畑という連続したプロセスを「時間軸を無視して地理的な空間に線を引く」ことには無理があると結論付けている。そして自然と文化が融合し、在来知や技術の詰まった焼畑の空間全体を環境保護の手段として理解することが可能であると結んでいる。

第10章「開発援助と中国経済のはざまで」(横山・落合)は、ウドムサイ県のラオス—中国国境近くの村で行われた調査をもとに、この地域における土地利用と生活の変化およびその変化の要因について論じている。最初に植物の利用方法と採集する空間について概説がされ、その植物を採集できる環境が政府による土地森林配分事業によって失われようとしていた事実を指摘する。この調査村は、筆者が第9章の調査に先立って対象とされたが、調査地変更の理由となったNGOによる常畑への転換支援プロジェクトを、筆者は改めて検証し一定の評価を与えている。一方、土地森林配分事業の結果、配分された土地では焼畑が禁止さ

れたため、焼畑地は常畑へと変化し、そこでの栽培作物や家畜の販売によって得た収入で米を購入しなければならなくなったとするが、住民にとって焼畑地に所有の概念がなく、また、栽培作物が現金収入に結びついていない斜面の常畑を「所有する」という概念は希薄であるとしている。そして、近隣の土地森林分配が行われていない村における、中国からのパラゴムノキ植林の株間での「稲畑」や、商品作物の契約栽培により、住民は厳しい経済状況打破の糸口を求めようとしているとするものの、併せてこれが「新たな波乱をもたらす」懸念も示されている。

第11章「商品作物の導入と農山村の変容」(河野・藤田幸一)では、自給的・自立的であったラオス農山村の生活基盤が、戦争と混乱の時代から経済発展の時代へと推移する中でどのような挑戦を試みているのかを、飼料用トウモロコシとパラゴムノキという商品作物栽培の導入に焦点を当てて論じている。ラオス農山村では、ランサン王国の時代から植民地期を通じて、自給農業を主体として生業構造や組織原理の改変が見られなかったものの、20世紀後半の戦争と混乱の時代に経験したアメリカ軍などによる外部世界からの介入は、生活基盤を暴力的に改変したとしている。1976年以降は、社会秩序の回復により農民は自発的に農地の開墾を始め、農業の集団化とその崩壊を経て、自給用作物への需要増加とそれに続く飼料用トウモロコシと雨季水稻といった商品作物の導入により、農地は拡大していったとし、飼料用トウモロコシおよび近年普及が目覚ましいパラゴムを取り上げて、その導入過程を概観する。ラオスにおいて飼料用トウモロコシは、当初タイから輸入されていたものの、2000年以降中国雲南省やタイへ向けての輸出が増加しているとして、主産地のひとつであるウドムサイ県における調査事例を紹介している。この村では飼料用トウモロコシ栽培によって、伝統的生業構造を維持した村落の数倍の現金収入を享受したとされ、両者の格差は今後ますます拡大するとしているが、同時に「化学肥料の存在すら知らない」農業体系が持続的とは考えられないという危惧を示している。一方、パラゴムノキについては、1990年から栽培が開始さ

れ、中国・タイ・ベトナムからの投資を背景に、急激に拡大しているとする。また、ラオス政府もゴム生産を焼畑に代わるものとして作付けを積極的に奨励し、「森林保全の切り札」としても期待を寄せているとし、大きく企業経営と農民経営の二形態のゴム園が見られるが、農民経営では販売価格と適地の選定が、また企業経営では政府によるコンセッションの混乱が問題になっていると指摘する。そして、このような状況下で、これからのラオスの農山村について、「国境を跨ぐ人と人とのネットワーク」を基盤として、①焼畑休閑地を含め広大な森林が残されている、②土地・森林資源や流通を管理のための制度不備と人材資源の不足、③住民が豊富な在来知識と技術を持つという状況を踏まえ農山村の人々の持つ潜在力の活用や農山村を主体として新たな生業構造や組織原理の構築を目指すべきだと結んでいる。

III 本書の評価

ほとんどの執筆者は、自らラオス語を用いて現地調査を実施しており、特に編者の一人である横山氏を含む数名は、青年海外協力隊員やNGOスタッフ等としてラオスにおける実際の社会開発に従事した経験から、現代ラオスにおける社会・経済の発展および農村の変容と環境の変化を当事者として目撃し問題を共有してきており、本書では傍観者的な観察と記述にとどまらない徹底した現場主義が貫かれている。

このため、土地配分や植林事業という行政施策のクリティックを含んだものや、中国経済や商品作物という産業資本の浸透あるいは、観光地化による問題等ラオス農山村において進行中のコンテンツポラリーなトピックをとりあげ、現地におけるデータの集積と精緻な分析によって得られた学術的成果を社会還元するという点において、傑出した地域情報の提供を行っているといえる。

しかし一方、第1章では本書の概要をなぞった感が否めず、もう少し編者の学問的主張が明確であってもよかったとの憾みも残る。ラオスの農山村を特徴付ける地域性や民族性、あるいは文化的所産としての生産技術などを概観することで、各章の内容をラオス全体の議論のなかでより具体的

に位置づけ、各論考で共有できる概念あるいはアウトラインを設定することは、本書からラオスを理解するうえで必要な作業ではなかったかと思う。

たとえば、多民族国家ラオスにおける「民族」について、本書における認識が全く触れられておらず、各執筆者の言に任せていることは、詳細な農山村の描写において、画竜点睛を欠くものと言わざるを得ない。ラオスにおける民族分類の変遷等については、第3章において言及されているものの、ここでも現行の49民族分類に踏み込んだ記述は見られず、この科学的根拠はさることながら、政府の正式見解を示したものである以上、ラオスという国民国家の農山村社会における民族を論じるうえでこの基本情報は不可欠といえよう。

このため、本書においては各執筆者が挙げる民族がどのように規定されたのかということが明白になっておらず、民族的なアイデンティティに言及していながら、実際には政策的な分類をもとに創出された不均質な集団をひと括りにして論じるという矛盾を否定できない。特に指摘しておきたいのは、「ラオ・トゥン（山地ラオ）」という表現で、中田氏が述べているよう実際のラオス社会でもしばしば耳にする民族区分ではあるものの、その実体性は乏しく、現在は正式にその使用が禁止された[新谷他2009]ものであるうえ、本文中でカム（本書中では「カム」「カムー」）やシンムーンといった北方モンクメール諸語話者と、言語的にかなり異なる東方モンクメール諸語話者のンゲ（現在の公式民族名はクリアン）やラヴェン（同、ユル）を同列に論じているなど、考証を経ずして民族を取り扱う用語・概念としては著しく不適切であるといえる。

また第4部については、水田稲作や焼畑あるいは狩猟・採集などといった伝統的なラオス農山村の生業というよりもむしろ、現代社会における生業の変容について描写する要素が強く、本書の一セクションとしては「生業」よりも相応しいタイトルが考えられたかもしれない。その点からすると他のセクションでも同様であり、本書全体が現代ラオスにおける農山村の社会変容を論じることを指向していることから、「ラオス農山村」の情景を胸に本書を手にとった一部読者の期待には、い

ささか応えていないともいえる。

IV おわりに

本書は、いくつかの検討すべき余地を残しているものの、ラオスにおけるこれからの地域研究を牽引する業績のひとつであり、ラオスの社会経済開発を考える上で極めて示唆的な、現在進行している農村社会における変容の実態を当事者の目から詳細につづったものとして特筆できる。編者である横山氏は、「まえがき」において「伝統と新たな波のはざまで揺れ動きながら、明日を模索していくラオス農山村の姿」を描く試みと述べているが、この「模索」は本書の執筆陣の中心である中堅・若手の研究者のラオスとの関わり方をも直接に表していると言ってよいだろう。

これに続く各執筆者の研究成果を、一ラオス研究者として大いに期待するところである。

（園江 満・東京農業大学国際食料情報学部・農学部／東京大学総合研究博物館）

参考文献

- 中田友子. 2004. 『南ラオス農村社会の民族誌——民族混住状況下の「連帯」と闘争』. 明石書店.
 新谷忠彦；C・ダニエルズ；園江満（編）. 2009. 『タイ文化圏の中のラオス——物質文化・言語・民族』. 慶友社.
 園江 満. 2006. 『ラオス北部の環境と農耕技術——タイ文化圏における稲作の生態』. 慶友社.

相沢伸広. 『華人と国家——インドネシアのチナ問題』 書籍工房早山, 2010, 212p.

本書は、インドネシア国家と華人との関係を、スハルト体制内部の政策立案過程を詳細に分析することを通して明らかにした力作である。インドネシアは世界で最大規模の華人口を抱える国であるが、1965年の9・30事件——公式の歴史理解では「共産党クーデター未遂事件」とされてきた——を機に成立したスハルト新秩序体制のもとでは、その華人たちに対し他国に類を見ないほどの抑圧的な施策がとられてきたことでも知られている。本書ではそうした一連の政策が、どのような

事態を背景に、誰によって立案され、そしてどのように実現されたのかを、時代区分に沿って明らかにしてくれている。

スハルト時代を通じ、中国や華人などを指す語として公的に用いられてきたのは、侮蔑のニュアンスが込められた「チナ (Cina)」という語であった。そしてその「チナ」にまつわる事柄は「チナ問題 (Masalah Cina)」として括られ、政策の対象とされてきた。著者によれば、この「チナ問題」は多くの研究者によって「華人問題」と同一視された上で、スハルト体制はいわゆる「同化政策」——華人が完全に現地社会に溶け込むことを求める政策——でもってその問題の解決を図ろうとした、と理解されがちであったという。これに対して著者は本書を通じ、「チナ問題」というのは単に「華人問題」ではない、と強く主張する。「チナ」という語は本来、中国、中国人、華人、そして中華文化を包括的に意味し得る多義語であり、「チナ問題」というのもまた同様に、中国との外交問題、国内における中国人と華人の峻別の問題、あるいは彼らの経済面を含む処遇の問題、文化をめぐる問題等々、政府が一体的に解決すべき問題群の総称としてあったのだという。その上で、この「チナ問題」という語で一体何が意味されたのかを、これまで明らかにされてこなかった内部資料や時の政策当事者へのインタビューを通じて、為政者側の思惑から読み解いていこうというのが、本書の狙いである。

したがって本書は、華人の政治家・有力者の思想の系譜から「同化政策」を位置づけようとしたり、あるいはその「同化政策」を中心的に吟味することを通じて「チナ問題」全体の構図を理解しようとする先行研究 [cf. Suryadinata 1979; Coppel 1983] とは、明確に一線を画している。国家運営・体制維持という観点から「チナ問題」を捉え直した際に新たに視野に入ってくるのは、外においては何よりも中国との外交関係であり、また内においては利害対立や権力闘争を引き起こす政権内部の様々なアクターの存在である。これらの視点を導入し、目まぐるしく変遷するものとしての「チナ問題」を、国内外の社会・政治的文脈に位置づけつつ読み解こうとしている点が、本書の何より

もの「売り」であると言えよう。

本書がとりわけ力を込めて記述するのは、「チナ問題解決政策立案国家委員会 (以下、「チナ問題委員会」)」が果たした役割についてである。というのも、スハルトが大統領代行に就任して約1カ月後の1967年4月末に設立された同委員会は、わずか60日間の時限委員会でありながら、その後30年以上もの長きにわたるスハルト体制を通じて繰り返し出されることになる「チナ問題」対処のための基本的枠組みを提示したからである (p.19)。前記のごとく本書の射程と位置づけを述べた第1章に続き、第2章では、このチナ問題委員会設立に至るまでの社会背景、とりわけ9・30事件後の国内の混乱状況と、文化大革命を本格化させつつあった中国の存在についてが言及される。その後の各章で著者は、スハルト体制を時期的に大きく3つに区分し、複合的・多義的な問題群としての「チナ問題」のうちどのような側面が重視されたのか、その変遷を明らかにしてゆく。

ひとつ目の時期は、1967年から73年頃にかけての体制創成期である。この時期は、中印両国がそれぞれ激動の只中にあり、また両国間の関係が極度に悪化した時期でもある。こうした背景のもと設立されたチナ問題委員会では、中国からの政治介入や影響力の浸透を排除し、またインドネシア国籍華人と外国 (中国・台湾) 籍の中国人とを峻別することこそが、体制にとって最重要の課題であるとの枠組みが示される。第3章では、同委員会の中で具体的に提議された項目が個別に解説される一方、第4章では、スハルト政権内部の権力闘争に視点を向けることで、上述の「チナ問題」への対処のあり方が属人的に揺らぐさまが明らかにされている。

ふたつ目の時期は、1973年から80年代末にかけての体制安定期である。社会全般が疲弊していた体制創成期に比べ、この時期になると官僚機構が着実に整備されるようになる。そうして社会の末端にまで張り巡らされた官僚機構を総動員することで、「チナ問題」に対し政府が一体となって取り組む制度形成がなされてゆくのである。また体制の安定に伴い、この時期における「チナ問題」の

主眼は、国内の華人の経済力を利用しつつ、彼らが政治秩序を脅かすことのないよう積極的に「同化」を推進することに重点が置かれるようになる。第5章では、このように「チナ問題」の位置づけが中国・中国人問題から華人問題へとシフトする中で、具体的に実現された政策および制度が詳述される。なお、この時期の後半、すなわち1970年代末から80年代末になると、国外においては改革開放期を迎えた中国の僑務政策が大幅に変更され、また国内においてはオイルショック後の原油価格下落という、大きな環境の変化が起こる。これらの事態を受け、インドネシア政府にとって華人とはもはや脅威ではなくなり、むしろ資本動員などを通じて活用されるべき存在へと変じてゆく。第6章においては、このように「チナ問題」に対する基本的姿勢が、「監視」から経済開発への「活用」へと徐々に変化してゆく中で、同問題に政府が一体的に対処するというあり方自体にほころびが見え始めた——この事実は後述のように、本書の方法論との関係で極めて重要であるように思われる——ことが指摘される。

最後の時期は、1988年からスハルトが退陣する98年までの体制末期である。この時期には、長らく閉ざされていた中国との国交が回復し、また経済自由化に伴って華人資本家が急成長する。こうした背景のもとで、「チナ」というのはもはや問題ではなく、むしろチャンスとなった。ただ、そのチャンスの恩恵を受けることができたのはスハルトをはじめとする一握りの層に限られ、結果として社会的に経済格差が目立つようになってくる。折しもこの時期、スハルト政権を支える権力基盤にイスラーム勢力が入ってくるが、それに伴い、従来「パンチャシラ・イデオロギー」のもと厳しく抑えられてきたはずの宗教・民族・人種等の政治化が、「比例主義」——人口比に応じた政治経済的富の分配を求める主張——という形で正統化されることになる。この文脈で「チナ問題」は、政府が一体となって対処すべき問題から、スハルト大統領の差配と華人資本家たち自身の努力によって解決されるべき経済格差の問題へと変質し、また「チナ問題」という言葉自体も、解決すべきものとしての政策用語から、相手——要には華人資

本家——を糾弾するための用語へと変わってゆくのである。第7章および第8章では、このように「チナ問題」が国家の問題から社会の問題へと解き放たれ、それが結果として1998年5月のジャカルタ暴動とスハルトの退陣へと帰結してゆく過程が描かれる。

なお、まとめの章に先立つ第9章では、ポスト・スハルト期の今日のインドネシアにおいて、かつて「チナ」として捉えられていた中国、華人、そして中華文化がどのような存在感を持ち、またどのように位置づけられるようになったかについての素描がなされている。

「華人と国家の関係を、中国という補助線を引き、国家というアクターを多元化することで、そのダイナミズムを明らかにする」(p.187)という著者の論旨は、総じて非常に切れ味鋭い。特にそれは、チナ問題委員会の影響がかなりの程度反映された体制創成期と体制安定期(の前半)の記述において、明快に示されている。我々は本書を通じ、政策立案の場の最奥部で「チナ問題」がどのように認識され、その結果どのような結論が得られ、またそれが実際どのようにその後の政策に結びついていったかを、かなりの程度——同委員会の中で具体的にどのような討議があったのか、その議事内容の細部とまではいかないものの——知ることができるのだ。こうした事実は、インドネシアに暮らすほとんどの華人にとって知り得ないことであつたし、また内外の研究者にとっても推測するしかできないことであつた。それを十分に解明できるだけの内部資料やキーパーソンに通じることができた著者の調査の労苦には、全くもって頭が下がる思いである。

しかしながら、スハルトの関心の変化もあつて「チナ問題」対処への政府の一体性が失われてゆく時期(第6章;第7章;第8章)になると、先行する各章で見られたような半ば一元的な説得力を持つような重要資料が得られなかったためだろうか——いや、そもそも政府の一体性が失われているがゆえに、政権中枢部の思考から社会的現実の多くを説明しようとする方法論自体が不可能なのかもしれないが——、やや表面的な社会経済論的

説明法が目立ってくる。そしてこの、政権部内の動向や情報の開陳ではない、一般社会の情勢分析に関して、本書の記述は実に簡素なのである。特にスハルト体制崩壊前後についての記述（第8章；第9章）は、物足りなさを覚えざるを得ない。こうした「物足りなさ」は通常、他の優れた研究成果 [cf. Purdey 2006; Hoon 2008] を引用することによって相当程度補える。しかし本書は、より広範な読者に向けて書き下ろしたという事情ゆえか、土台となった博士論文 [相沢 2006] と比しても関連研究への言及が極端に乏しく、また先行研究をあまりに単純化し過ぎている感が否めない（第1章）。¹⁾ あとがき部分で著者は幾分詩的に、本書の目的はインドネシアの、そしてより広いアジアの理解を「豊かにする」ことにある、と述べている（p.207）。そうであるならば、本書によって豊かにされるべき研究蓄積に対して、相応の言及があってしかるべきではないだろうか。さもなくば、逆に初学者にとっては、この学問領域がそもそも貧しいものであると誤解させてしまいかねない。

最後に、インドネシアで「華人である」ということをローカルな場から考察し続けてきた者の立場から、本書の趣旨からすればやや的外れであることは承知の上で、あえて本書の限界性について言及しておきたい。政府の内部資料を繰り返つ、政策がどのように練られ実現されたかを明らかにする本書の意義は、その政策の影響が社会的に広範に及んだだけに、大きいことは疑いようがない。ただし、前述の観点に立って本書で扱われているのは、あくまでも「対処すべき問題」として政策当事者に現前化したものとしての「チナ」——中国との関係がある時期においては大きな比重を占めることもあった——なのであって、一方で政策の対象とならないような「チナ」にまつわる事柄およびその周辺事象については、ほとんど語られていないのである。何よりも欠落しているのは、

生活者としての華人たちの多様な経験であろう。²⁾ また、中央の政策には反映されないような地方——地方政府ではない——ごとの実情、そして歴史・社会的に構築されてきた「チナ」に対する思いやイメージ、記憶なども、およそ射程には入ってこない。もちろん、これら全てを一書内で詳述しようとするれば、論述の焦点や分析の視角がぼやけてしまい、むしろ本書の価値を落としてしまうだろう。しかしながら、政策当事者が見なかった社会的現実としての「チナ」およびその周辺への目配りを欠いたままでは、この地域の近現代史の過程で差異化され^{しるし}けられた存在としての「華人」——あるいは「華人性」——のダイナミズムを捉え損なう恐れがある。

こうした意味において、本書で論じられているのはあくまでもサブタイトルどおり「チナ問題」なのである。そしてそれは間違いなく、メインタイトルに掲げられた「華人と国家」についての総体的理解に達するための重要な一側面を切り開いてくれた——したがって「豊かに」してくれた——ものであると評したい。

（津田浩司・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

引用文献

- 相沢伸広、2006。「スハルト体制とチナ問題」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科博士論文。
- Coppel, Charles A. 1983. *Indonesian Chinese in Crisis*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

1) たとえば、「チナ問題」が「同化問題」とは決してイコールではないことは、すでに多くの先行研究でも指摘されていることではなかっただろうか。代表的なものとして貞好 [1996; 2008] を見よ。

2) スハルト新秩序体制によって華人以上に直接的な抑圧の対象となったのは、「9・30事件の元凶＝秩序の破壊者」と位置づけられた共産黨員——およびそれと何らかの関わりがあると疑われた人々——であった。近年になって、同事件後の粛清の嵐の中を細々と生き抜いた人々——取り上げられている華人は僅かであるが——の経験をオーラル・ヒストリーの手法で掘り上げようとする力強い研究も出てきているが [藤目 2009]、そこで明らかにされている社会的現実、政策の現場を注視しても決して明らかにできない、しかしながら非常に重要な意義を持つものの好例と言えるだろう。

- 藤目ゆき (監修), ジョン・ローサ; アユ・ラティ; ヒルマン・ファドリ (編). 2009. 『アジア現代女性史5 インドネシア——九・三〇事件と民衆の記憶』 亀山恵理子 (訳), 明石書店. (原書: John Roosa; Ayu Ratih; and Hilmar Farid, eds. 2004. *Tahun Yang Tak Pernah Berakhir: Memahami Pengalaman Korban 65: Esai-esai Sejarah Lisan*. Jakarta: Lembaga Studi dan Advokasi Masyarakat (ELSAM), Tim Relawan untuk Kemanusiaan, Institut Sejarah Sosial Indonesia).
- Hoon, Chang-Yau. 2008. *Chinese Identity in Post-Suharto Indonesia: Culture, Politics and Media*. Eastbourne: Sussex Academic Press.
- Purdey, Jemma. 2006. *Anti-Chinese Violence in Indonesia, 1996–1999*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 貞好康志. 1996. 「インドネシアにおける華人同化主義の国策化——プラナカンの志向と政治力学」『東南アジア——歴史と文化』25: 3–27.
- . 2008. 「スハルト体制の華人政策と反応——『同化』の諸含意と矛盾の循環 (1970年代までを中心に)」『華僑華人研究』5: 124–143.
- Suryadinata, Leo, ed. 1979. *Political Thinking of the Indonesian Chinese 1900–1977*. Singapore: Singapore University Press.

増原綾子. 『スハルト体制のインドネシア——個人支配の変容と一九九八年政変』東京: 大学出版会, 2010, 332p.

インドネシアにおいて30年間続いたスハルトによる個人支配が、なぜスハルトの辞任というソフトランディングによって終焉を迎えたのか、またその終焉への過程の解釈は比較政治上どのような意味をもつか、というエキサイティングな問題提起から本書の議論が展開する。

この問いに対して著者は、スハルト体制を「翼賛型」個人支配体制と位置づけて、次のような仮説を立てた。広範であったスハルトによるパトロネジ配分が大統領一族へと偏向されたことへの不

満から、改革勢力に妥協する「ハト派」が与党ゴルカルの国会議員の中に出現し、彼らと改革勢力とのコンセンサスによってスハルトの辞任が実現したとする。

この仮説を検証した議論を、各章の内容とともに紹介しよう。

第1章「スハルト体制と1998年政変をどう考えるか——問題提起と分析視角」で、著者はまず白石 [1997] や Aspinall [2005] などの議論を以下のようにまとめている。家産制的支配と合理的な官僚制による「開発」を特徴とするスハルト体制は、90年代に文民政治家の台頭＝軍人の地位低下と大統領一族のビジネスの急拡大により個人支配としての性格を強めた。その結果、国家と社会との間の「灰色地帯」が狭まり、98年政変が起きた。この政変では改革勢力の運動は弱く、国軍も政変を左右するような決定的な行動を取らなかったとする。

権力闘争に着目する先行研究に対して、著者は体制内「ハト派」が権力闘争の背後で改革勢力との連携と合意形成を模索していたとする Aspinall [2005] の示唆を検討して、ソフトランディングが実現した過程を解き明かそうとする。

しかしその際、「ハト派」を体制内に生じさせにくいとする Linz の「スルタン支配型体制」(本書では文化的要素を排除して「個人支配」とする)モデルは、広い支持基盤をもち安定的な支配体制であったスハルト体制には適用できないと指摘する。そこで、パトロネジ配分の範囲と国家による監視・暴力のレベルとを軸に個人支配概念を四分類し、スハルト体制をパトロネジ配分が広範で監視と暴力のレベルが相対的に低い「翼賛型」の個人支配に位置付けた。

そして、これまで集票マシンにすぎず立法過程に影響力をもたなかったとされてきたゴルカルを分析の中心に据えている。ゴルカルこそ、翼賛型個人支配体制下での分配のチャネルとして政治的ダイナミズムを生み出す場だったからである。

第2章から第7章までは、時系列に沿って体制の変容と崩壊の過程を説明している。

第2章「翼賛型個人支配としてのスハルト体制」では、広範なパトロネジ配分によってスハルトが体制の支持基盤を固めた70年代の様相を描く。

スハルトはまず、政治エリートの人事とエリート間競争を利用することで政策決定への介入と自身の優越的な地位の確保を行った。また、スハルトはテクノクラートを登用して経済合理化を進める一方で、経済的パトロネジ配分も怠らなかつた。国営企業の収益を予算外資金として流用し、自らのビジネス・パートナーであったリム・シュウ・リョンら華人「政商」に輸入独占権などの経済的特権を与えた。

パトロネジの配分は国軍に対しても行われ、治安維持機能とともに政治社会機能も国軍が担うとする「二重機能 (dwi-fungsi)」ドクトリンがその既得権を正当化した。

さらに、学生運動、イスラーム勢力、労働組合を、ゴルカルを通して懐柔する一方で、国軍の暴力によってパトロネジ配分の偏向に不満をもつ勢力を分裂に導き、反政府運動を抑制した。

第3章「1970年代のゴルカル——模索と停滞」では、ゴルカルの与党としての組織化の過程を概観している。

国軍が64年に設置した「ゴルカル共同事務局」は、スハルト体制下の71年総選挙で大勝して「ゴルカル」に改称した。しかし、利害調整の組織的基盤や人材をもたず、また与党でありながら政策決定過程に参加できなかった。

そこで、ゴルカル中央執行部は組織整備に取り組んだ。まず、支持調達のための活動を行う人材の養成を図った。しかし、イスラーム学生協会 (HMI) などの学生団体の政府への不信感は強く、人材リクルートは難航した。また、78年に中央・地方の各執行部を監督する顧問会議を設置し、スハルトは中央顧問会議議長として自ら中央執行部をコントロールする権限をもった。

しかし、依然としてゴルカルは内部の統一性と政党としての社会的基盤を欠いていた。そこでスハルトは、第4章「ゴルカルの再編と社会的エリートのリクルート」で描かれるように、83年スダル

モノを総裁に就けて組織改革を図った。その結果、中央執行部の人的構成は国軍将校から文民エリートへと大きく変化した。学生運動出身者が学生団体間・世代間の交流を、HMI出身者の増加がイスラーム志向を促し、ネットワーク的性格をもつ諸団体を通してゴルカルは社会的連続性をもった。

ゴルカルは、スダルモノ改革を通じて政府に批判的な勢力を懐柔して取り込み、体制の安定を実現したのである。

第5章「巨大与党のジレンマ——自立の試みとその挫折」によれば、一連の組織改革で巨大化したゴルカルは政府と国軍からの自立を試みた。

ゴルカルは同会派議員が政府を躊躇なく批判できる仕組みを整え、与党としての役割の向上を試みた。スハルトの強い権限や92年総選挙への介入がこの動きを阻む。

一方、国軍が87年総選挙でのゴルカル不支持を表明したため、ゴルカルは国軍からも自立しようとする。地方議会・首長選挙でもゴルカル会派と国軍会派が対立した。

スハルトは国軍内で勢力を誇るムルダニの影響力を払拭しようと、93年に国軍司令官にフェイスル・タンジュン、ゴルカル総裁にハルモコをそれぞれ就け、国軍が嫌う技術系官僚出身のハビビとその支持母体であるイスラーム知識人協会 (ICMI) に傾斜した。

さらに、スハルトは競争・対立の発生を憂慮してその意に反した議員を解任した。その結果、国軍との対抗上スハルトに依存せざるを得なくなったゴルカルの主体性は低下していった。

第6章が描く「スハルト・ファミリーの台頭とゴルカル内部の亀裂」とは、90年代のことである。

スハルトの長男バンバン・トリハトゥモジョが、90年代ゴルカル中央執行部にメンバーを送り込んでいた国軍子息会の会長に就任し、同会は政権の強力な政治基盤となった。また、スハルトの長女トゥットゥットに近いハルトノ陸軍参謀長らが国軍内でゴルカル支持を主張して、ゴルカルに対する優位を主張する親ハビビの国軍主流派と対立した。

一方、ICMIなどのイスラーム系勢力が97年総

選挙で躍進し、ゴルカル内部で国軍系グループとイスラーム系・学生活動家出身者のグループとが拮抗することとなった。

しかし、スハルトによるパトロネジ配分がトゥットウットのグループに偏ったため、議員任命や閣僚ポストを獲得できなかったICMIなどが体制から離反した。国会の機能向上を図る動きもこの時期に出始めた。

第7章「1998年政変とスハルト体制の崩壊」の描写で、著者の本領が発揮される。

97年7月の通貨危機とそれへの政府対応に対する市場の嫌気から、危機前の1ドル=2,400ルピアの為替相場は98年1月には1万4000ルピアにまで急落した。

この状況の中、「改革（Reformasi）」を唱える学生運動や偏ったパトロネジ配分に不満をもつICMIのエミル・サリムなどの改革勢力と、ハルモコ議長ら国会指導部やエキ・シャフルディンらゴルカル会派議員など体制内「ハト派」とが政治改革に関する積極的な対話を通して、大統領権限抑制の必要性についての認識を共有した。

ジャカルタ暴動のような「火をつければたちまち燃え広がるような社会状態」の中で、犠牲者を出すことなく混乱した政治状況を收拾しようとした国会指導部は、スハルトの即時辞任を要求した。ゴルカル中央執行部内で優勢であった国軍子息会などの大統領派はこれを批判したが、国会ゴルカル会派ではハビビ派・改革支持グループが議論を主導し、スハルト即時辞任を国会として要求するに至った。

スハルトはギナンジャールら閣僚からも即時辞任の勧告を辞表とともに突きつけられ、ついに国会勧告を受け容れて辞任した。

この頃の国軍はというと、スハルトの女婿ブラボウォとウィラント国軍司令官との権力闘争に明け暮れ、政治変動で主導権を握る機会を失っていたのであった。

終章「個人支配の終焉とインドネシアの民主化一敗者なき体制転換」では、スハルト辞任後に権力の空白状況が発生しなかったこと、「完全な勝

者」「完全な敗者」の不在、議会手続きの尊重への政治エリート間での合意の存在、といった3つの要因が民主的体制への転換を可能にした、と分析している。その際、出身団体を同じくする体制内外の者の間での日常的コミュニケーションが重要な役割を果たしたとして、本書の議論を締めくくっている。

ここで、本書のインドネシア政治研究における視点を先行研究との比較を通して吟味したい。

まず、民主化後のパトロン・クライアント関係に基づく政治の継続と暴力による紛争解決（＝法の支配の機能不全）を示唆している点で、市場が政治的に構築されて自由主義が歪んだとするRobison and Hadiz [2004] や Rosser [2002] などの見解に近いといえる。ただし、スハルト期に実業家として台頭し、その後のユドヨノ第一次政権で入閣し経済成長を推し進めた政治家が98年政変でどのような動向をしていたのかが明らかでなく、その後の政治状況への示唆を見出せない。すなわち、経済政策に大きな影響力を持ったユスフ・カラ（のちに副大統領）らの動向に立ち入っていないことは心残りである。

また、体制内「ハト派」と改革勢力との間の合意の重要性を強調するあまり、ギナンジャールら経済閣僚の位置づけが不明瞭である。Robison [1986] や Kawamura [2008] がいうように、インドネシアの経済政策はプリブミ企業の底上げを図るナショナリズムと市場原理を重視する自由主義との間を揺れ動いてきた。両者のバランスをとりながら、スハルトはパトロネジの配分とその偏向を行ってきた。ゆえに、プリブミ企業の育成を図ることでゴルカル内のプリブミ実業家からの支持を獲得し、ウイジョヨ・ニティサストロら自由主義勢力に対抗しつつスハルトの信頼を維持してきたギナンジャールら経済閣僚の動向について深く追究すべきである。そうでなければ経済閣僚の辞表の提出が、それまで頑なに辞任勧告に抵抗してきたスハルトの翻意を促す決定打となったことを説明できない。

しかし、特筆すべきは本書がもつ権威主義政治の分析への新たな視点である。比較政治学上の「個

人支配」概念を「アメ」(パトロネジ)と「ムチ」(暴力・監視)の配分の態様から捉え直した点は、これまでの権威主義政治の研究になかった切り口である。

同時に、本書は民主化分析に関しても新機軸を打ち出した。これまでのインドネシアの民主化研究はエリート間での利害調整で民主化を説明するものであった。たとえば、Robison and Hadiz [2004]は民主化過程での政治経済エリートのフォーマル・インフォーマルなつながりとその再編を明らかにし、Slater [2004]は政治エリートによるカルテル政治を論じた。これに対して本書は、パトロネジ配分のチャンネルとして体制の安定をもたらしたゴルカルが、経済危機後にはパトロネジ配分偏向に不満を抱く民衆と体制内エリートとのコミュニケーションのチャンネルとしても機能し、皮肉にも体制崩壊をもたらしたとする。体制自体がいわば時限爆弾を内包していたことを新たに指摘したといえよう。

インドネシアに限らず、権威主義からの民主化というレジームチェンジを経た途上国の政治体制を分析する上で、本書は欠かせない一冊である。

(小西 鉄・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

参考文献

- 白石 隆. 1997. 『スカルノとスハルト——偉大なインドネシアをめざして』岩波書店.
- リンス, J. 1995. 『全体主義体制と権威主義体制』高橋進(監訳), 陸月規子; 村上智章; 黒川敬吾; 木原滋哉(訳), 法律文化社.
- Aspinall, E. 2005. *Opposing Suharto: Compromise, Resistance, and Regime Change in Indonesia*. California: Stanford University Press.
- Kawamura, K. 2008. *Indonesia's Development Policy in Historical Perspective*. Background Paper No. 2 for JICA-IDE Joint Workshop on Indonesia's Development Strategy and Future Direction of JICA's Assistance in Indonesia. Jakarta.
- Robison, R. 1986. *Indonesia: The Rise of Capital*. (Asian Association of Australia, Southeast Asia Publications Series No. 13) Sydney: Allen & Unwin.

Robison, R.; and Hadiz, Vedi R. 2004. *Reorganizing Power in Indonesia: The Politics of an Oligarchy in an Age of Markets*. London and New York: Routledge Curzon.

Rosser, A. 2002. *The Politics of Economic Liberalization in Indonesia: State, Market, and Power*. Surrey: Curzon Press

Slater, D. 2004. Indonesia's Accountability Trap: The Party Cartels and Presidential Power after Democratic Transition. *Indonesia* 78 (October): 61–92.

||| Rachel V. Harrison and Peter A. Jackson, eds. *The Ambiguous Allure of the West: Traces of the Colonial in Thailand*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, ||| 2010, 268p.

Thirty two years ago Benedict Anderson penned one of the most influential essays in the history of Thai studies: “Studies of the Thai State, the State of Thai Studies.” The essay was published less than two years after one of the most traumatic incidents in Thai political history: the October 6, 1976 massacre of leftist students by security forces and militias with close links to the Palace. This event partly accounts for the essay's iconoclastic tone. In the essay Anderson controversially turns some of the most cherished axioms about Thailand on their head, including the role of colonialism in Thai history: rather than being the only country in Southeast Asia to escape colonial rule Anderson argues that Siam was in fact indirectly colonized, and unfortunately so since it “retarded the development of the Siamese nation”; the monarchy was a “modernizing” force only in the same sense as the European colonial powers in Southeast Asia were modernizers; and the “success” of Siam's leadership, both the Chakri kings during the absolutist era and the military dictatorship under Sarit and his successors, was due to Western “imperial pacification” of SEA during the colonial era and the Cold War.

It was thus with some eagerness that this reviewer received Harrison and Jackson's edited volume of

essays, which promised to revisit the vexed question of Thailand's relationship with the West and the place of colonialism in its history and cultural life. Planning for the book began as early as 2002 at a time when academic discourse and indeed popular culture were full of nationalist resentment at perceived Western neo-colonialism, this time in the form of ruthless currency speculators and the IMF following the currency and financial crisis of 1997–98. It is a little unlucky that the book's publication coincides with an acute economic recession in the West and soul-searching about its relative decline in world affairs, while Asian economies are buoyant and the world is supposed to have entered an "Asian century." Yet anti-Western sentiment in Thailand has flared up once again, this time fuelled by royalists in their defence of the monarchy in the on-going political crisis.

The editors represent the book as a contribution to Thai studies for its use of "postcolonial analysis" as well as for its application of the "critical theoretical perspectives of international cultural studies." The problem the book hinges on is the accepted truth that Thailand was not colonized, which has long been used to make claims for the country's uniqueness and has thus limited comparative studies by which Thailand might be better understood. It is also an article of faith in the country's conservative, "royalist nationalism." The book appears in the wake of a belated boom in post-colonial studies in Thai universities over the last decade (even if its peak in the Western academy arguably passed two decades ago).

The volume consists of ten essays. The editors (rather indulgently in this reviewer's opinion) each include two of their own essays, and each writes their own introduction. It contains an eclectic collection of studies of Thailand's relations with the West (with an emphasis on the cultural). There is much that will be of value to scholars interested in this perennial question. The book opens with a foreword by a key figure of the subaltern studies school, Dipesh Chakrabarty, with some remote theoretical musings on "naming" and "repetition." Jackson's two essays make the case for

postcolonial theorizing of Thailand. Pattana Kitiarsa's essay presents an exhaustive account of the origins and meanings of the term *farang*. Loos, drawing on her research for her book *Subject Siam* (2006), describes the Thai state's own colonizing drive to incorporate the former sultanate of Patani. Harrison's essay critiques popular fiction and a number of movies, past and present, on the theme of Thai encounters with the West. Ingawanij and MacDonald examine the highly original work of the Thai film director, Apichatpong Weerasetakul, acclaimed on the international independent film circuit but largely ignored in his own country. Herzfeld's essay, which explores the "dynamics of crypto-colonialism," is the only comparative study of Thailand and Greece that this reviewer is aware of. Thongchai Winichakul gives a typically feisty and intellectually stimulating account of the "localization of postcolonial studies" in Thai academia; in fact, one of the book's strong points is its examination of the dynamics of Thai academia which, ironically, given the book's theme, is usurping the place of the former Western metropolises as the centre for production of the best quality scholarship in the field. The highlight of the volume for this reviewer is Thanet Wongyannawa's account of the reception of Foucault in Thai studies, which combines rigorous scholarship with the postmodernist's playfulness and moreover is a delight to read.

However, since the book presents itself as a theoretical contribution it should be judged on those grounds, and this is its major weakness. To reverse Jackson's use of the term (p. 40), the book's premise appears to "fetishize" theory and its clunky cultural studies jargon (eg. "hybridities," "ambiguities," "binaries," "subaltern," "dominance," "subordination," etc.) while disparaging the empirical. The oft repeated justification (p. 4, p. 8, p. 9, p. 10, p. 42, p. 48, etc.) that Thai academia neglects the theoretical in favour of the collection of mountains of data, is overstated.

The editors and a number of the contributors waste too much time pondering whether Thailand is "colonial," "semi-colonial," "postcolonial," "auto-colonial," "crypto-colonial," or "neocolonial." Such navel-gazing

is somewhat exasperating when it occurs at precisely the moment when Thailand is freer of Western “domination” than it has been for a century and a half. Indeed, if there is any time that the country ought to be a little more subject to “Western domination” — in the form of the principles of liberty and equality and basic democratic rights — it is now. For most contributors colonialism is one of history’s “Bad Things” (eg. Thongchai: “domination by the West on the global stage must be countered,” p. 150), but as Anderson argued in his essay for the colonial period, Thailand is perhaps unfortunate now, as Siam was then, not to have been more fully “colonized.”

There is a sense that runs through the book that if Thai Studies is to be “sophisticated” it needs to be theoretically dense. It must be said that the more theoretical essays contain some of the most turgid and often vacuous prose that it has been this reviewer’s misfortune to read. Some sentences read almost as a parody of postmodern waffle. For example, Jackson writes,

The structuring principles of power, subordination, autonomy and resistance that underlie the diverse processes of Siam/Thailand’s elite and subaltern cultural hybridities emerge from a politico-cultural system founded upon an historical strategy of changing surface forms to mimic, but never fully reproduce, the external patterns of the superpower of the day . . . (p.204)

Such tortuous gobbledygook should not be inflicted upon an unsuspecting scholarly public. Nor should they be made to feel intellectually inferior if they find it indecipherable.

Even when one invests the time needed in re-reading sentences and paragraphs to decode such language it is difficult to see that this volume has made any important “theoretical” advance on Anderson’s essay over thirty years ago — which was also a model of lucid, incisive writing. While it is a worthy aim to attack the (now largely discredited) Thai discourse of uniqueness, this volume is hardly the first to do this.

Reynolds’ edited volume examining discourses of Thai national identity in 1991 was an early successful attempt at just that, and since the 1990s there has been a large Thai language scholarship on “*khwa-m-pen-thai*,” to the extent that in all but the most conservative political discourse criticism of Thai uniqueness is *de rigueur* (perhaps a correction is even due). The boom in Area Studies in Thai universities over the last decade which is hardly touched upon in this book, has also helped undermine such claims of uniqueness.

One wonders, therefore, whether Jackson’s project to “reinvigorate semicolonialism with theoretical force” (p. 47) is both mistimed and misplaced. Anderson’s revisionist study of colonialism in Thailand’s political history, produced after the Palace’s implication in the October 6 massacre and right-wing backlash, was in fact a full frontal attack on “Chakri absolutism.” While *The Ambiguous Allure of the West* touches on the monarchy it largely escapes the withering treatment meted out by Anderson. This is a pity, because if the energies of Thai studies scholars are needed to uncover forms of domination and subordination in Thailand, they would be more productively directed towards those much pervasive and tangible forms that are orchestrated by the monarchy and its defenders today. Unlike Western colonialism, which for a long time has been an “open book” as far as scholarly access is concerned (one can even get grants from the colonizers’ governments to fund it), research into the monarchy’s political, economic and social control in Thailand is vastly more circumscribed in every way, and thus seriously understudied.

In summary, this volume’s theoretical aspirations left this reviewer unimpressed. Yet that weakness should not discourage the judicious reader from engaging with the remainder of the book which contains much that will stimulate.

(Patrick Jory · Faculty of Arts, The University of Queensland)

References

Anderson, Benedict. 1978. *Studies of the Thai State*,

the State of Thai Studies. In *The Study of Thailand: Analyses of Knowledge, Approaches, and Prospects in Anthropology, Art History, Economics, History, and Political Science*, edited by Eliezer B. Ayal. Centre for International Studies, Ohio University.

Reynolds, Craig J., ed. 1991. *Thai Identity and Its Defenders: Thailand 1939–1989*. Clayton: Monash University.

||| Rudolf Mrázek. *A Certain Age: Colonial Jakarta through the Memories of Its Intellectuals*. Durham: Duke University Press, 2010, 328p. |||

When embarking upon the research for *A Certain Age*, historian Rudolf Mrázek envisioned quite a different book from the one he ended up writing. From 1992 to 2000, he interviewed over 70 Indonesian men and women who had lived through the changes from Dutch colonial rule to Japanese occupation to independence. He expected to hear first-hand accounts of great transformations: “the transition to modernity, from colonialism to postcolonialism . . . the failed (or unfinished) Indonesian revolution.” However, in the course of these dozens of meandering reminiscences, he “stumbled across a particular landscape” that came to move him intensely. Instead of a conventional narrative of modernization, he offers us a meditation on memory and its vagaries. In addition, by interweaving Indonesian memories with the insights of European avant-garde intellectuals such as Benjamin, Le Corbusier, and Proust, he invites us to reflect on the nature of modernity itself, to reconsider it from the perspective of a coloniality that he sees as often anticipating the metropole.

For this reviewer, ever intruding while reading *A Certain Age* were flashbacks to the interviews in Curtis Levy’s documentary series *Riding the Tiger* (Australia, 1992) on modern Indonesian history; the series gathered reminiscences of the same time span from much the same type of eyewitness as appear in Mrázek’s book (indeed the very same eyewitnesses, in the case of

Roeslan Abdulgani, Sukarno’s UN ambassador, and Father Mangunwijaya, the renowned author). Perhaps Mrázek at first intended to produce what would amount to an expansion in book form of the work of historical recovery that that documentary series was. However, while *Riding the Tiger* argues a clear thesis that Indonesia’s military dictatorship finds its origins in indigenous feudalism, Dutch colonialism, and Japanese militarism, *A Certain Age* by contrast merely suggests or proposes its theses or, better, simply raises questions. The open-ended, ambiguous nature of the work is reflected in the very title: what exactly does the author mean by the phrase “a certain age”? The late colonial era being recollected? The moment of recollecting itself, the last years of the Suharto regime and its immediate aftermath? The physical age of the interviewees themselves, in their seventies and eighties, that particular degree of distance from the world being recalled? Even, a late colonial age of seeming “certainties,” such as the apparent permanence of Dutch domination? The modifier “a certain . . .” itself alludes to imprecision, to the slipperiness of what one is trying to capture.

While the multivalent title does justice to the content of the book, the subtitle, “Colonial Jakarta Through the Memories of Its Intellectuals” hints at a narrower book than Mrázek actually provides. His interviewees recall provincial towns almost as much as Batavia/Jakarta itself; particularly prominent is not surprisingly Bandung, the “Paris of the East,” “more *du jour* than the metropolis,” but even the Boven Digoel prison camp on the New Guinea periphery appears. The term “Intellectuals” suggests that Indonesian equivalents of Benjamin and Adorno will be cited, but in fact the interviewees come from a wide range of occupational backgrounds: aristocrats, officials, generals, businessmen, even a *kroncong* songwriter (Gesang). The book also represents the ethnic diversity of the late colonial milieu, including Chinese Indonesians (e.g. Dr. Ong Hok Ham) and Arab Indonesians (e.g. Hamid Algadri) as well as Dutch who had “gone native” (e.g. Professor G.J. Resink whose family went back two centuries in the Indies and Poncke Prinsen who defected to the Indo-

nesian revolutionary forces). Perhaps the more catch-all category “intelligentsia” would have been more accurate than “intellectuals.” In any case, the interviewees, in sharing schooling in the Dutch language, certainly constituted an “elite” within Indies society, no matter how humble their individual circumstances may actually have been (some interviewees, for instance, speak of only wearing shoes to the classroom).

Mrázek organizes his inquiry into a tour of five architectural loci: bypasses and flyovers; walls; fences; classrooms; and windows. Like the individual Chinese logographs around which Jonathan Spence builds his chapters in *The Memory Palace of Matteo Ricci*, these loci give Mrázek the opportunity to talk about much more than the loci themselves. He begins with the freeways that tower over contemporary Jakarta, linking office buildings, hotels, and megamalls into a web of ultra-modern spaces floating above a sea of *kampung*, traditional neighborhoods. Similarly, colonial modernity created quarantined spaces, sealed off from the “native” (might we not view the post-colonial as, not the rejection, but the fulfillment of the colonial?). The author then moves on to “the Walls,” actually not just to the walls in themselves but to the intimate and not-so-intimate spaces that they enclosed. In the former category were the “pre-modern” washrooms where one scooped water out of tanks to bathe. In the latter category were the “salons,” the rooms for receiving guests where the family’s modernity was on display (including the very modern mini-museums of native antiques and “exotica”). The following chapter, “The Fences” is really more about the modern asphalt roads on which the interviewees sped from their houses to their schools, passing fence after fence, “overwhelmed by the newness of the modern urban and the metropolitan,” “growing accustomed” (as Mrázek quotes George Simmel putting it), “to continual abstractions, to indifference towards that which is spatially closest and to an intimate relationship to that which is spatially far removed.”

The other pole of the interviewees’ childhood existences was the classroom, the destination of their

daily commutes and the window on, and doorway to, their destiny, as individuals and as post-colonial Indonesians. The schools, despite themselves in all but the expressly nationalist Taman Siswa and similar institutions, instilled discipline. This the interviewees actually remember with warm gratitude — a discipline that was so different from what one interviewee, Mr. Hardjonegoro, describes as Javanese “dreaming” or overindulgence in “feeling,” a discipline that was “like learning to fly,” as another, former Air Marshal Omar Dhani (imprisoned after the 1965 counter-coup) portrayed it. It was the colonial school that taught what “freedom” was and produced the leaders that would teach the nation how to be free, proclaiming the lesson like teachers standing at the blackboard.

The tour culminates in a reflection on the Window, actually more on paintings as windows and on painting-making and painting-viewing as the calling into being of new realities (a quintessentially colonial act), whether we are considering the colonial idylls of the “*mooie Indië*” genre or the stirring propaganda posters of the Japanese period. Considering windows, Mrázek asserts as elsewhere that “colonies seemed to have been modern before the modern West truly happened.” This is one of the most exciting theses in his whole book and yet to prove it he would have had to resort to argumentation more grounded in precise chronology than his lyrical, evocative technique provides. What Mrázek does succeed in conveying through a flood of fragments of conversations is the very “feel” of what it was like to “become modern.”

(Andrew J. Abalihin · San Diego State University)

		Vina A. Lanzona. *Amazons of the Huk Rebellion: Gender, Sex and Revolution in the Philippines*.		
		Wisconsin: University of Wisconsin Press, 2009,		
		392p.		

Vina Lanzona readjusts the historian’s lens when viewing the rebellion by the Partido Komunista ng Pilipinas (Communist Party of the Philippines, PKP) in the early

1950s by arguing for the critical role of women inside the organization. Through the extensive interviews she did of surviving PKP women cadres, she paints a revolutionary organization whose survival depended at a lot of times to the painstaking involvement and contribution of these women. For the first time therefore we have stories of women revolutionaries' experiences as told to an admiring academic. These are significant tales not only because they broaden our understanding of the communist movement, but also — and perhaps more importantly — since they probably are what we will be left with. The destruction of massive amounts of captured communist documents in a fire that destroyed a building in one of the military camps in Manila sometime in the 1960s means that henceforth the piecing together of more fragments of the PKP's postwar histories will have to rely on oral testimonies. Lanzona has done us a fantastic service in preserving these women-revolutionaries' recollections and for letting them speak all over her book.

Yet, while the PKP showed its distinctiveness and ascendancy over other political organizations in the Philippines by actively involving women in its projects, it still could not escape being sexist. Most of them worked as mail couriers, secretaries to top leaders, and finance officers in Party cells and units of the PKP's guerrilla army, the Hukbong Bayan (People's Army, or Huks), but there were a few also who became political officers of armed units, and those who rose up to the top leaderships of the Huks and the Party. The latter remained pretty much under male control and men continue to be "promoted as commanders while women served in support units and remained subordinate to men." Women "were [also] effectively excluded from combat duty and discouraged from engaging in direct military action" (p.160).

So biased were the Huks against women assigned heavier burdens that the only way Celia Mariano could get a promotion was "to assert herself and demand that the party recognize her capacity for leadership" (p. 170). But how many other Celia Marianos were granted that privilege? Mariano was most likely exempted because

of her tertiary education. She also admitted she preferred talking politics with the men rather than the women. Here we notice the seeds of an embryonic elitism within the party of the proletariat which infected communist parties once they assume power.

And when other women did show signs of becoming more like Mariano, you get the sense that they were being kept within bounds by their male comrades for fear they might run out of control. Kumander Dayang-Dayang's alleged malfeasance was promptly dealt with for she was a comrade who appeared to have done so (we never really got to hear her side of the story). She was shot (Lanzona notes that Dayang-Dayang was portrayed in masculine terms by her male comrades such that when they decided her fate, her "masculine persona and her male acts warranted a masculine punishment: the firing squad" (p.173)).

If the politico-military relationships between male and female revolutionaries were already that complicated, how about their personal ties? Chapter 4 of Lanzona's book is probably the most intriguing because it discusses the way in which communists had tried to deal with an internal problem that had (and continues to) bedeviled communist organizations and undermined their cohesion: love and sex.

V.I. Lenin, once snidely castigated Inessa Armand that sexuality "was not a Marxist subject" and that concepts like "free love" were nothing but "a bourgeois concept." To allow free love was to open cadres to "promiscuity and adultery." The venerated idol of many a communists argued that the "only logical and objective solution to the question of 'free love', based on strictly Marxist class principles was civilian marriage — with love — entered into by true proletarians devoted to a shared cause." Of course Lenin was the first to violate this norm by making a mistress out of Inessa (to the silent consternation of his wife Nadya).

The PKP agreed with its Great Leader's position, with Huk leader Luis Taruc playing down the "emotional content" (p. 189) and describing intimate relations inside the organization in masculine terms. PKP men were also the predators and women cadres often agreed

to become their lovers “because he was my comrade [and] we had a cause bigger than ourselves” (p.202). Of course, radical Valentinos like PKP leading cadre Casto Alejandrino took advantage of this attitude with braggadocio, nurturing relationships with four Huk women — including possibly a minor — apart from his wife (Politburo chief Jesus Lava and secretary-general Felicísimo Macapagal had three!!).

But the PKP also added its own unique panache to the issue of love and sexuality. To deal with pervasive “sexual opportunism” the Party “drafted a remarkable document titled ‘The Revolutionary Solution of the Sex Problem’” (p.215), which allowed, among other things, men to keep a “forest wife” to keep them company if “he can convince the leading committee . . . to which he belongs that either his health or his work are being adversely affected by absence from his wife.” Taking a forest wife is also allowed if the cadre inform his “lowland” wife and give her “the freedom to enter into a similar relationship in the barrio or the city, if she, too, finds herself unable to withstand the frustration” (p.217).

There were criticisms against this arrangement, but with the top cadres leading the way in acquiring “forest wives” and not being reprimanded for it, these complaints never gained traction.

These women accepted their fate, with one poignantly absolving Alejandro for he “was really married to the revolution” (p.203). Another woman cadre, Linda Ayala, explained to her critics why she married Jesus Lava this way: “Do not think that I chose him because he was a top leader. That is not true. *I do not love him, but for the sake of the movement, I am willing to be with him.* We will not find anyone who will be as intelligent as him; we cannot replace him anymore. So I am giving myself to him.” She added: “Since we got married, my major assignment was to safeguard him” (p.204, italics mine).

Lanzona is scathing in her critique of this revolutionary machismo and she is definitely into something when she argues that these “extramarital relationships compromised the growth and solidarity of the move-

ment.” This thread — exploring the link between gender bias and revolutionary collapse — is something worth studying in the future.

Except for some minor complaints (I have issues with Lanzona’s use of certain scholars she cites as authorities on the gender relationships inside the revolution), *Amazons of the Huk Rebellion* is a path-breaking work. It is a worthy addition to the already growing literature on the centrality of women in Southeast Asian history and politics.

(Patricio Nuñez Abinales · CSEAS)

References

Rappaport, Helen. 2010. *Conspirator: Lenin in Exile*. New York: Basic Books.

||| Sylva Frisk. *Submitting to God: Women and Islam in Urban Malaysia*. Denmark: NIAS Press, 2009, ||| xvii+216p.

Since the late 1970s, the *dakwah* (reform, revivalist) movement and later the government, tried to elevate the status and practice of Islam in Malaysia. Although commencing from a different departure point, the state Islamisation project and the revivalist embraced a similar platform to produce a non-western modernity of Malaysia. The general picture of Malaysian Islamisation and modernization shows strong male domination, while women are controlled and placed into domestic roles. However, beyond this general picture lie possibilities that Malay women in the Islamisation period experienced individual transformation in the sense that “they produce, recreate, and transform Islamic discourse and practice” (p.5). In this context this book, resulting from a dissertation project during nearly a year of anthropological work involving individual women and religious studies in Kuala Lumpur, Malaysia from 1995 to 1996 followed by subsequent research until 2009, shows interesting grounds for presenting intimate portrayals of Malay women’s agency in Malaysia Islamisation.

As indicated by the title, this volume elaborates personal and collective experiences of Malay women embracing Islam in reaching piety, by focusing on three religious activities namely, increasing religious knowledge, performing religious duties, and carving out a religious space. In bringing the intimate experience of Malay women as an agent in Islamisation, the introduction shows an awareness of an analytical shift, from a “subordination” point of view, where women are victimized subjects, to “resistance” where women act as agents. A theoretical feminist platform on women’s agency has enabled scholars to present Muslim women’s active engagement in tradition or religious practice to resist male domination. However, this book wants to go beyond the established feminist notion of agency. It insists that, for the case of Islamisation in Malaysia, “women’s religious commitment and practice have dimensions other than resistance or subordination” (p.8). The introduction also provides a brief review of works on women’s piety in Muslim and Christian traditions, while clearly emphasizing its unique findings on the meaning of piety and agency in Islamisation in Malaysia.

After the introduction, the book provides a critical background explanation of the interplay between ethnic identity and religious affiliation in shaping modernization and Islamisation in Malaysia. It subsequently presents a very interesting discussion on the tension between *adat* and Islam, and changes the aspect of gender relations where women’s active engagement in scripture and women’s access to education was promoted by early Islamic reform (*kaum muda* movement) since the colonial period, which evolved into postcolonial Islamic reform (*dakwah* movement). It is here where the objective shifts to safeguarding the moral values of Malay women. It carefully examines the complexity of meanings, forms and aspects of the *dakwah* movement, which then leads to the author underlining the similarities in the importance of religious education.

Acquiring religious knowledge is an important point of departure in submitting to God’s will. In this

sense, I am very impressed with the elaboration in Chapter 3 of various kinds of women’s religious classes in attaining religious knowledge in mosques, workplaces, *dakwah* groups and homes, where different issues, debates and tension in joining religious studies, including the intimate experience of the reason and meaning of adopting veiling, are presented in detail. Chapter 4 delivers a slight description of women’s everyday religious practices centering on the five pillars of Islam: the declaration of faith (*shahada*, the Oneness of God), ritual prayer (*sembahyang*), fasting during the Ramadan month, paying the yearly tithe (*zakat*), and pilgrimage. This chapter, however, leaves much room for further elaboration. In discussing the Oneness of God, for instance, it would be more interesting if the author could seek a deeper investigation into women’s personal religious experiences through scripture or practice that connect to *shahada* as the very basic Islamic pillar, before looking into external experiences such as perceptions toward non-Islamic beliefs and practices. Except for the section on praying, in which the book presents interesting stories of challenges faced by Malay women, the elaboration on fasting, *zakat*, and pilgrimage could have been improved through providing more intimate portrayals of Malay women’s acts of piety.

The discussion on women creating religious space, in Chapter 5, leads to an interesting feature: the changing aspect of traditional Malay *adat*, Islam, and forms of women’s religious agency. It shows that middle-class Malay women are able to transform *kenduri*, a rural Malay traditional-syncretism communal ritual where women possess supportive yet peripheral positions over men who are assigned a central element, into a *majlis doa*, where women acquired higher control and authority in performing religious gatherings in their homes. However, after diligently exemplifying the religious scripture and performing the Islamic religious practices, there is still the question “are you *mukmin*?” This critical question is addressed in the next Chapter by presenting the intriguing nuances of women’s efforts in becoming *mukmin* (“God fearing person” p.162;

“being person with *akal*, a person who could resist *nafsu*” p.173). Surprisingly, in the quest to become *mukmin*, they do not have intentions to disrupt established religious perceptions and practices that men are the religious authority of the family.

The previous point leads into the conclusion of the book, that pious Malay women who flourished within Malaysian Islamisation do not necessarily challenge or resist male authority, as usually understood in feminist discourse. Their desire to submit to God’s will, include taking on traditional gender roles as devout housewives, are more important, rather than the need to resist the patriarchal norm. This book provides an original assessment of Muslim women’s experiences as religious subjects, whose acts and meaning of piety, are contradicted in the conceptualization of agency in feminist theory. Despite the limitations mentioned, this book is rare. It does not only present the more nuanced unique features of Malay women and Islam as an already distinct feature of women in Southeast Asia, but it also postulates a different perspective of agency within feminist thinking.

(Kurniawati Hastuti Dewi · Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

Yos Santasombat. *Flexible Peasants: Reconceptualizing the Third World’s Rural Types*. Chiang Mai: Regional Center for Social Science and Sustainable Development (RCS&SD), Chiang Mai University Press, 2008, 287p.

This book is an outcome of the author’s extensive study on the importance of local knowledge and biodiversity in relation to ethnicity and community-based natural resource management. It discusses representations of peasant society in northern Thailand since around 1990. Based on his study of political elites in the 1980s, his experiences in the movement for democratization and for community forests, the author discusses the political strategies among rural and minority people claiming rights vis-a-vis the state. This book is a result of his

long-term studies in Nan and Chiang Mai Provinces in northern Thailand and it demonstrates his framework for understanding peasant society and its changes in Thailand.

Among Thai researchers studying peasant society, political movements among peasants and transformation of peasant identity have been key points in exploring how peasant society has been transformed in the face of modern socio-economic changes in Thai society especially after the 1980s. In Thailand, political peasant movements’ claims to land and livelihood rights became active following the implementation of land-use policies and development projects, and the rise of a popular movement against the government. Thai peasant studies have insisted on the possibility of resistance against the state by peasants, contrasting peasant society with the urban one in discussions on peasant identity formulated against authority as well as on subsistence livelihood.

Particularly in northern Thailand, where there are people referred to as “hill tribes,” political movements claiming land rights and their relationship with ethnic representations are prominent issues in recent studies, as we see in Chapters 2 and 3 of this book. In this movement, Karen, one of the ethnic minority groups, are represented as indigenous forest protectors who live in harmony with nature. There has been much discussion pointing out that this unified representation of Karen, their sustainable agricultural practice and their relation with their traditional culture, runs the risk of undermining their claims for a greater share of natural resources and development assistance. On the one hand, NGOs and academics who have perpetuated this representation regard the strategic effects of such political claims as being more important than recognizing the varied realities of actual Karen communities regarding commercial and agricultural changes, including the fact that many Karen today engage in commercial agriculture and wage labor rather than subsistence rice farming. In contrast, those who are critical of such views claim that this kind of idealized representation potentially contributes to the marginalization of Karen farmers and

excludes the Karen from elite and state discourse, especially in regards to agricultural practices [Walker 2001]. Regarding this argument, the author clearly adopts the former position, emphasizing the strategic importance of this symbolic representation of Karen against hegemonic discourse and the state. Moreover, he claims that this ethnic representation makes Karen themselves conscious of their local knowledge as useful and stimulates them to re-value their culture and identity in the process of struggle (see Chapter 3).

In this book, the author situates the symbolic value of peasant representation within broader contexts. He explores the different ways in which rural groups in northern Thailand are struggling and experimenting with various forms of symbolic representations of themselves and their communities in their resistance towards the state, other agencies and interests. In this process, issues of local knowledge and biodiversity become paramount to claims for human rights as well as community rights over resource management in relation to ethnic representation. With the two key points above, he tries to grasp the complexity of rapidly changing peasant societies in the context of modern industrialized agriculture and nation-wide hegemony over peasants, and attempts to re-conceptualize northern Thai rural societies and peasants in more dynamic and flexible ways.

In the introduction, the author reviews the history of peasant studies and shows how these previous studies adopted a unilinear framework of evolutionary development to argue that peasant society represents the lowest stages of development and the primitive “other” counterpoint to the “self” posited by civilized society. He also points out that in analyzing peasants in the context of social and economic changes, some researchers have discussed the persistence of subsistence economy, while others claimed the disappearance of peasantry due to capitalist expansion. Yet, none of these studies dealt with the dynamism that exists between subsistence production and commodity production. As a result, these studies have propagated a form of peasant essentialism, and the author argues that such a perception is

not appropriate for understanding peasant society today.

How, then, can we re-conceptualize the peasantry? Chapter 1 traces the history of socio-economic changes in peasant society in northern Thailand and argues for the re-conceptualization of the peasantry. Firstly, peasant identity has to be understood as flexible. In contrast to the power of the nation-state which manipulates rural and marginalized people’s identities, human rights and eco-politics came to be related to ethnicity. In this situation, we need to develop ethnographic and political forms of representation that correspond to flexible rural identities. Secondly, the author insists that in the northern Thai context, expanding the issues from those of classical peasantry to ones that incorporate ethnicity opens up new possibilities. This represents a shift in the politics of social space from the narrow productionist issues of agrarian policies to broader issues involving not only the struggle for land but also the struggle for control over symbolic value and its use in the construction of collective identities, which can be suitable for dispossessed, marginalized and heterogeneous populations. This is why even though the book refers to “northern Thai peasantry,” the author includes not only northern Tai lowlanders but also ethnic highlanders such as Lua and Karen in his discussion.

In Chapters 2 and 3, the author explores how the ethnic identity of highland minorities is situationally reconstructed within the context of changing power relations and socio-economic conditions, especially with regards to the struggle for forest land rights.

Chapter 2 is about the identity formation of Lua people, one of the ethnic highland groups in Nan Province whose daily lives are intimately linked to shifting cultivation. Since the late 19th century, forest areas deemed to be commercially profitable were granted to logging concessions through some forest policies, and local forest users were condemned as forest destroyers. But after a major landslide in 1989, the Royal Forest Department radically shifted management priorities from commercialism to conservation, which strictly restricted shifting cultivation and forest use. This has

increasingly threatened the security of local villagers. In response, Lua villagers in the region, NGOs and grassroots activist groups, demanded access to forests and swidden fields while opposing the designation of the forest areas as a national park. Through the politics of place, and through religious rituals that re-established their sense of place as the first inhabitants and rightful owners of the land and increased ethnic consciousness, the unity of a community in resistance was formed. The author thereby claims that Lua land has been conceptualized as the site of struggle, a contested terrain of symbolic-material practices and of ethnic boundaries, which continue to produce the opposition between Lua and others.

Chapter 3 demonstrates the relationship between the cultural production of Karen ethnicity and the political economy of symbolic power in the contest over legitimacy of resource-use. The author traces the construction of the Karen image during the past two decades as forest guardians and conservationists against hegemonic state discourse which condemns them as forest destroyers. That is, some of the Karen themselves, as well as NGO leaders, promote the strategy of investing Karen local knowledge in political action in order to reinforce their identification as “children of the forest.” Through this, the negative identities embodied by the Karen through their negotiations with the state as denigrated hill-tribes, illiterate peasants and forest destroyers are transformed into a single social political category of “indigenous forest manager.” The author concludes that when ethnicity enters the terrain of environmental issues in areas with peasant populations, then the conventional politics of agrarian reform evolves from a struggle for forestland as a means of production to “territory” as a space within which not only autonomous production but also the reproduction of “cultural identity” can take place.

Chapter 4 reveals the process by which peasants re-discover their cultural traditions of farming local varieties and diverse crops in order to remain innovative and flexible. Since the 1960s, the government has tried to use only a few high-yield species of rice and

peasants no longer have complete control over their production system, both in terms of knowledge about production and the paths to acquiring such knowledge, as well as control over actual varieties of local species. Nowadays, however, many peasants have begun to revert to practicing small-scale diversified agriculture and converting cash crops to paddy in order to reduce production risks. The author concludes that Marxist and modernist theorists are wrong to argue that the growth of commerce will uniformly convert peasants and local production from traditional into modern. On the contrary, cultivars’ diversity and knowledge can be retained, revived, and re-developed in many peasant communities. These peasants demonstrate their capacity to reconstruct new images of biodiversity managers in order to create a more dynamic symbolic representation of themselves.

Chapter 5 presents the analysis of changes and dynamism of peasant economies in northern Thailand by revisiting four villages which had been studied by anthropologists during the past 50 years. Thai peasants have been coerced into increasing dependence on external political, economic, technological and cultural forces. In summarizing this process, the author states that because of these influences, Thai peasants’ identities and social roles are flexible, diverse and self-contradictory, capable of responding to varying and particular situations, conditions, and locations. For example, northern Thai peasants are continually faced with increasingly complex economic decisions including fishing, growing vegetables for consumption, petty trade, and wage labor. Furthermore, the peasant economy is never confined to subsistence activities such as rice production alone. This is akin to being both peasants and laborers at the same time. Thus, the author concludes that an adequate ethnographic study of rural northern Thai communities should situate them within broader transnational and global contexts that effectively dissolve such anachronistic binary oppositions as rural-urban, traditional-modern and peasant-proletariat.

Summarizing the main arguments in Chapter 6, the author reveals how the re-conceptualization of “flexible

peasants” is useful in understanding rural people within dynamic relationships and with multiple identities. His point is that contemporary rural politics is increasingly elaborated in terms of human rights, community rights over resource management, and ethnicity. This provides an important arena in which new images and identities of contemporary peasants are constructed and represented as protectors of forests and managers of biodiversity. It also marks a shift in the anthropology of peasants from the idea of peasants as “unitary objects” to “complex subjects,” and furthermore, forces us to take into consideration the significance of the peasantry as a social force.

In a situation where previous studies on peasants and their political movements have emphasized the hegemonic construction of a discourse of subsistence livelihood and its relationship with peasant identity or a discourse of idealized rural life, this book is valuable in arguing in favor of how peasants themselves have managed and reformed their own representation subjectively in several concrete situations against the hegemonic discourses of the state. On the other hand,

in the author’s eagerness to stress the subjectivity of peasants, the book lacks due consideration of the process in which these discourses surrounding subsistence and ethnicity have been mutually constructed by peasants themselves, on the one hand, and hegemonic power on the other; in the face of socio-economic changes, not only in the political arena but also in everyday life. We can say that this book provides us with a starting point for further investigation of how these discourses affect the everyday life of rural people, how they are re-constructed and negotiated, to what extent these discourses regulate or influence people’s options, and what kind of options are available in a particular situation.

(Tazaki Ikuko (田崎郁子) · Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

References

- Walker, Andrew. 2001. The “Karen Consensus,” Ethnic Politics and Resource-Use Legitimacy in Northern Thailand. *Asian Ethnicity* 2(2): 145–162.